

臣なるは揚屋にて參會し、それにおよぼざるは、さんちやの二階ざしきにてたのしみ、又それよりくだりては、青のうれんのかげにたちより、ぶんくさうおうのあちだて云々略中
 けち略中 好色いせ物語元祿中むかし田村と申けちおはしましけり、注けち一名局、一名はし女郎四の巻長文也

〔洞房語園 異本拾遺〕新町河合權左衛門といひし者の内に、雲井とて局の女郎あり、彼に其頃二刀の達人宮本武藏が逢馴て、同町の揚屋甚三郎が許へ折々通ひける、寛永十五年の春、中肥前の島原一揆起り、西國御大名仰付られ、發向の砌、宮本氏も黒田家の幕下へ見廻として、彼地へ赴くとて、雲井に暇乞のため、甚三郎が許へ來り、揚屋にて發足の用意をしたり、

引鹿戀

〔一目千軒〕鹿戀かこゝ

此女郎、太夫天神とくらべては、大に詫たる體也、ゆへに世人さびしき人を、お茶たてらるといふより、かこひといふ、むかしは文字も圍とかきし也、物を閑にて、深山にて小男鹿を戀るこゝろより、中比鹿戀といふ、かの聲よりして鹿のくらゐと定めたり、むかしに別はありし、今は太夫に付なりといふ、説非なり、引舟とかこひとは別也、かこひはかうし女郎の内なり、價は拾八匁にて、貫は八匁なりしに、延享三寅年やみて、安永二巳のとし價をあらためて、鹿戀始る、價は委く輿に記す、

引舟の事

引舟といふは、太夫につきて行ものなり、太夫は大船に表し、縛しほる舟のこゝろにて、ひき船の名あり、これ客のつかひもの也、客附のとり捌皆此引舟の役也、依て別に價なし、

〔濱花街 酒樽〕万松モシ新町大には、女郎に引舟ひきふねといふがあるじやアムりやせんか、江戸では芝居の棧敷には、引舟と云ふがありやすが、女郎の名を引舟といふは、どふいふ譯でありやすす、